

総合目録データベース実務研修受講報告

河原田 伊左男

平成11年10月18日(月)から11月5日(金)の3週間にわたり、学術情報センターにて標記研修を受講する機会を得た。長期の研修であり、その全てをこの紙面で報告することはできないが、学術情報センターの事業について少しでも知っていただければ幸いである。

1 学術情報センターの概要

学術情報センター(学情)は、大学共同利用機関として昭和61年4月に設置された。学術情報の収集・提供と、学術情報システムに関わる研究開発を目的としている。前身は東京大学文献情報センター。

目録所在情報サービスのNACSIS-CAT・NACSIS-ILL、研究者向け情報検索サービスNACSIS-IRなどに加え、現在では電子図書館NACSIS-ELS、研究者公募情報提供サービスのNACSIS-CISなど、そのサービス範囲が広がりつつある。また、サービスの対象も、日本国内だけでなく英国やタイ王国など、海外にも拡大している。

なお、平成12年度からは国立情報学研究所に改組となる。学情の事業は引き継がれるが、より研究重視の機関となる模様である。

2 研修の目的とカリキュラム

学情では、各種研修の需要調査や教材開発、日程調整を行なう研修課を設けている。研修事業は、学情の各サービス推進のためのサポート事業と位置づけられている。たとえば、NACSIS-CATについては(地域)目録講習会があり、その基本思想や特徴、端末の操作方法等の講習を行なっている。ほかにも、学情の事業に関連のあるテーマで講演する学情シンポジウムを開催するなどしている。

今回参加した総合目録データベース実務研修は、「NACSIS-CATまたはNACSIS-ILLシステムを利用した業務について十分な知識と経験を有する業務担当者」を対象に、「目録所在情報サービス参加図書館において、業務担当者の指導や講習会の講師を行うなど、各館の中核となる担当職員を養成する」こ

とを目的に実施されている。内容は、講義形式のもの(講義、特論、演習、見学会)と、個人作業でレポートを作成する個人研修の大きく2つに分かれている。変わったところでは、研修の目的にもあるように講習会での講師の養成も兼ねているため、目録講習会とは何かといった講義や、講師になったときに必要となるプレゼンテーション技法に関する演習があった。

ちなみに、各種研修の受講者の選考は、その機関での緊急度を優先している。たとえば(地域)目録講習会では、NACSIS-CATに新規接続した機関や、異動者が多く経験者が少なくなった機関を優先する。修了者が多いところは選考から漏れることが多い。関西地区では、申し込みが多い割に地域講習会を開くことのできる設備を持った図書館が少ないため参加が難しくなっており、これを解決するためにも、会場の提供や講師派遣など私立大学の協力を得たいとのことであった。

3 総合目録データベースについて

(1) 目録所在情報サービスの基本思想

総合目録データベースは、OCLCのような総合目録が日本にも欲しいという図書館界の要望に応じ、学術審議会の「学術情報システムのありかた(答申)」を経て、昭和55年から検討が始まった。昭和58年に東京大学情報図書館学研究センターを東京大学文献情報センターに改組・拡充し(学術情報センターになったのは昭和61年)、昭和59年12月、東京工業大学をテストユーザーとして目録所在情報サービスを開始、翌年4月、名古屋大学と大阪大学を加えて本運用を開始した。

US MARCがカード目録を計算機データ化しようとしたのに対し、総合目録データベースはカード目録が表そうとした書誌構造の世界をデータベースに載せることを目的とした。書誌ファイル、統一書名ファイル、著者名典拠ファイル、所蔵ファイル、参加組織ファイルなどを作り、それらをリンクさせることにより、その目的を達成しようとした。

近年のネットワーク環境の変化やオープンシステム化により、新CAT/ILLが開発され、旧CAT/ILLと並行運用されている。平成16年には新CAT/ILLへ完全移行する予定である。

(2) 総合目録データベースに関わるサービス

ア NACSIS-CAT

目録所在情報サービスは、運用開始以来、機能の追加や環境整備などにより発展してきた。平成11年9月現在で参加機関数は712、総合目録データベースの書誌データ件数は約500万件、所蔵データは約4,000万件となっている。

総合目録データベースは図書と雑誌のファイルに分かれている。和洋の区別はない。目録データに関しては、複数の外部MARCを参照MARCとして取り込んだり、遡及入力を行なうなどして参加館からの入力をしやすくした。平成12年早々にはCHINA-MARCを導入。平成12年1月に多言語対応を行ない、中国書やハングルで書かれた図書の登録を進めたい考えである。

雑誌目録データベースは、現在『学術雑誌総合目録』とほぼイコールの関係となっている。雑誌目録データベースの充実により、『学術雑誌総合目録』の役割は終わりつつあるという考えもある。電子ジャーナルについても書誌を入力できるようにすることになっており、案を作成中である。

イ NACSIS-ILL

NACSIS-ILLは、ILL業務のうち所在調査と通信連絡の部分をシステム化したものである。NACSIS-ILL参加館以外にも、英国図書館のBLDSCや国立国会図書館にも依頼することができる。ILLには、総合目録データベースのデータが参照利用されている。

参加機関は国立大学は99大学(参加率100%)、公立大学は59大学77組織、私立大学で351大学444組織となっている。それ以外にも、短期大学、高専、大学共同利用機関等が参加している。運用開始以来利用が伸びつづけ、平成10年度は約94万件の利用(複写・貸借)があった。利用の特徴として、国立大学どうし、私立大学どうしでの依頼・受付が目立つ。これは料金の相殺などのシステムが国立大学間や私立大学間でそれぞれにあるからである。

複写依頼件数は医大が上位を占め、貸借については国立の総合大学が目立っている。年々依頼・受付件数が増えているが、処理日数は逆に短くなっている。こうした統計はホームページ上で公開されてい

る⁽¹⁾。

ウ NACSIS-IR

研究者向けサービスNACSIS-IRは、国内外の59種のデータベースを提供している。NACSIS-CATでの目録所在情報サービスもデータベースに含まれている。

オンラインデータベースサービスは、初期には図書館員やサーチャーによる代行検索が中心だったが、近年ではエンドユーザーが検索することが多い。また、データベースのスタイルも、書誌型データベースから全文データベースへと移ってきている。こうした移り変わりを受けて、学情も平成12年1月から新IRを提供。旧IRがメインフレーム・ワードインデクス型・汎用情報検索システムだったのに対し、新IRではオープンシステム化(UNIXサーバ型)・全文情報検索システム・検索機能の高度化を基本とし、ラインモードのユーザインターフェイスとグラフィカルユーザインターフェイス(GUI)の2種類を用意する。今後はZ39.50への対応を考えている。

ちなみに、総合目録データベースのデータを利用したWebcatが、学情の広報活動の一環としてインターネット上で無料提供されているが、機能はNACSIS-IRと比べて、複雑な演算ができない、検索結果を200件以上表示しないなど限られている。これは、無料提供であるためコスト面で厳しいのと、NACSIS-IRの呼び水としての効果を期待してのことである。

(3) 目録情報の品質管理

総合目録データベースの役割は資料の所在情報の共有と交換であり、目録を共同分担方式で作成し、MARCをローカルシステムにダウンロードすることで目録作業の負担の軽減を図ろうとしている。

総合目録データベースでは、目録規則としてNCRとAACR2を採用することになっているが、データフォーマットの独自性や、多くの参加館が共同目録を構築する上で誰もが判断できる単純な基準が必要であったことから、目録規則以外にも多くの決まりごとがある。それらは、『目録情報の基準』や『目録システムコーディングマニュアル』に記されている。

『目録情報の基準』は現在第4版。総合目録データベースの構造の解説と、データ作成の原則を示しており、加除式の『目録システムコーディングマニュアル』は書誌データの細かな点について説明して

いる。

このようにマニュアル類を用意しても、各書誌データの品質のばらつきや重複は起こるため、レコード調整により品質を維持しようとしている。図書では、書誌データの間違いを発見した場合、発見館は書誌作成館に対してFAX等により問い合わせを行ない、必要に応じて書誌作成館は書誌を修正し、その旨を所蔵登録館に通知する。雑誌の書誌については発見の連絡を受けて、学情で修正している。

4 研修レポート

研修の大きな柱の一つが、研修レポートの作成である。これは研修報告書とは異なり、『『目録所在情報サービス』の全体または部分に対して、多くの図書館が抱えているであろう問題（または参考となるであろう事柄）をテーマとした上で、『～について検討してほしい（基準を定めてほしい）』といった学術情報センターへの依頼事項だけでなく、それを解決するための具体的な方法を自らが提案する』ものである。

研修期間が限られているので、研修参加日までに資料収集やレジュメの作成をしておく。研修初日にレジュメを提出、2日目にそれにそってテーマを発表し、出された意見やアドバイスを参考に、提出日（研修最終日前日）までに仕上げることになる。

原則として他の研修生と重複するテーマは認められないので、テーマ設定、資料収集から仕上げまで1で行なうことになるが、学情のかたから資料を提供してもらったり、研修生の間で可能な限り意見交換や資料提供を行なった。筆者が選んだのは、西洋古版本の書誌に関する事柄である。

研修期間のほぼ半分の時間がレポート作成にあてられているので、当初はその時間を講義にあてたほうがためになるように思えたが、自らテーマを決め、資料を収集し検討してレポートを完成することにより、学情のシステムやサービスに対する理解を深めることができる。

5 所感

「目録所在情報サービス参加図書館において、業務担当者の指導や講習会の講師を行うなど、各館の中核となる担当職員を養成する」という研修の目的は、筆者にとって大きなプレッシャーであった。研修で取り残されるのではないかと、研修レポートが仕上がらないのではないかとという懸念から、早い時期からいろいろな資料を読むことになったが、その甲斐もあって、なんとか修了することができた。そのときに得た知識が現在も役立っているのがありがたい。なかでも学情のホームページ²⁾には有用な資料やデータが公開されているので、ぜひ一度訪れていただきたい。

今回の参加者は筆者以外は全国の国立大学の図書館や大学共同利用機関のかたであった。同じ大学図書館員でも、国立大学と私立大学では交流する機会が少ないように感じるので、この研修の場で知り合うことができたのも大きな収穫であった。

3週間にわたり日常の業務を離れ、学情についてだけでなく、書誌データについて、大学図書館について、その他いろいろなことを学び考えることができ、得る点が多かった。最後になったが、この研修に参加させてくださったみなさんにお礼を申し上げます。

注

(1) <http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/INFO/ILL/stat-index.html>

(2) <http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

追記

1でも少し述べたように、学情は平成12年4月から国立情報学研究所に改組となったが、今回の報告では研修参加当時の名称に統一した。

ホームページから得た情報では、総合目録データベース実務研修にも変更があり、目録担当者コースとシステム担当者コースの2コースに分割され、それぞれ2週間の日程となっている。研修レポート作成もないようである。

(かわはらだ いさお 学術資料課)